

「家庭と幼稚園との連携による、
幼児英語活動プログラムの開発」

平成 18 年度『千代田学』事業プロジェクト報告書

大妻女子大学短期大学部英文科

井上 美沙子

守田 美子

山下 榮

平成 19 年 4 月

目次

はじめに.....	1
1. 幼稚園と家庭の連携による次世代育成支援.....	4
1.1 概要.....	4
1.1.1 公立幼稚園における英語活動の意義.....	4
1.1.2 絵本を核にした英語活動.....	5
1.1.3 プログラム.....	6
1.1.4 プログラムの運用方法.....	10
1.2 実践報告.....	12
1.3 結果.....	13
1.3.1 協力家庭の保護者アンケート.....	13
1.3.2 幼稚園側からのフィードバック.....	19
1.3.3 個別面談による園児のアセスメント.....	20
1.4 まとめ.....	22
2. 大学と地域の連携による次世代育成支援.....	24
2.1 概要.....	24
2.2 活動経過.....	25
2.3 「千代田学」レクチャーシリーズ アンケート結果まとめ.....	29
おわりに.....	43

はじめに

平成18年度「千代田学」事業プロジェクト、次世代育成支援参加プランとして認可された、本プロジェクト「家庭と幼稚園との連携による、幼児英語活動プログラムの開発」では、地域における本学、大妻女子大学短期大学部英文科が、どのように貢献できるかを考えた上で、次の2つの形態による次世代育成支援を提案した。

- (1) 幼稚園と家庭の連携による、次世代育成支援
- (2) 大学と地域の連携による次世代育成支援

まず、第一番めについては、区内の幼稚園において、幼児が日頃から身近にいる人々（担任教諭、保護者、友達など）と一緒に英語活動の体験をすることで、人間関係の絆を深めるといった試みを行った。これは、本学が英文科ということもあり、区内のモデル幼稚園に英語活動の教材や教授法を提供し、定期的に出向して、デモ授業を行うということで協力をすることで、次世代育成支援を行うというものである。

わかりやすく、図に示すと以下のようなになる。

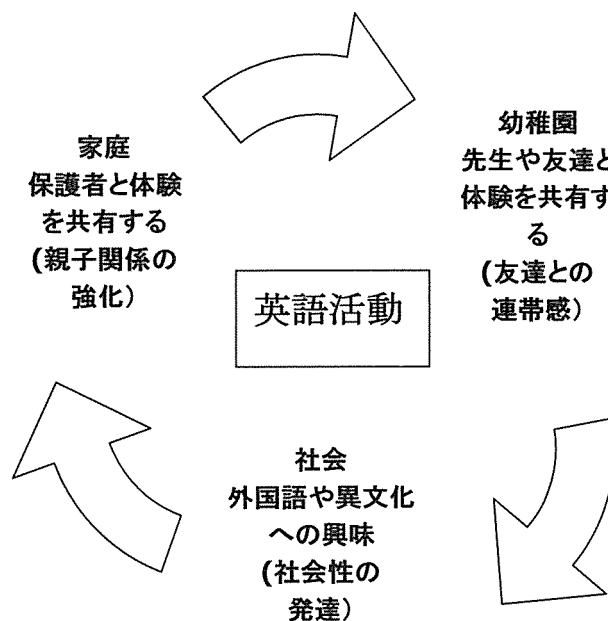


図1：幼稚園と家庭の連携による、次世代育成支援

二番目の形態については、家庭での英語活動支援に関連した講演会やイベントを大学が主催し、これを区民に無料開放することで、地域活動に貢献をすると同時に、また近い将来、次世代を担っていくべき、区内で勉学をしている本学学生たちへの教育的効果をも上げるという試みを行った。

この2つの次世代育成支援に対し、自治体である千代田区と本学との連携及び協力関係は、以下のようにまとめられる。

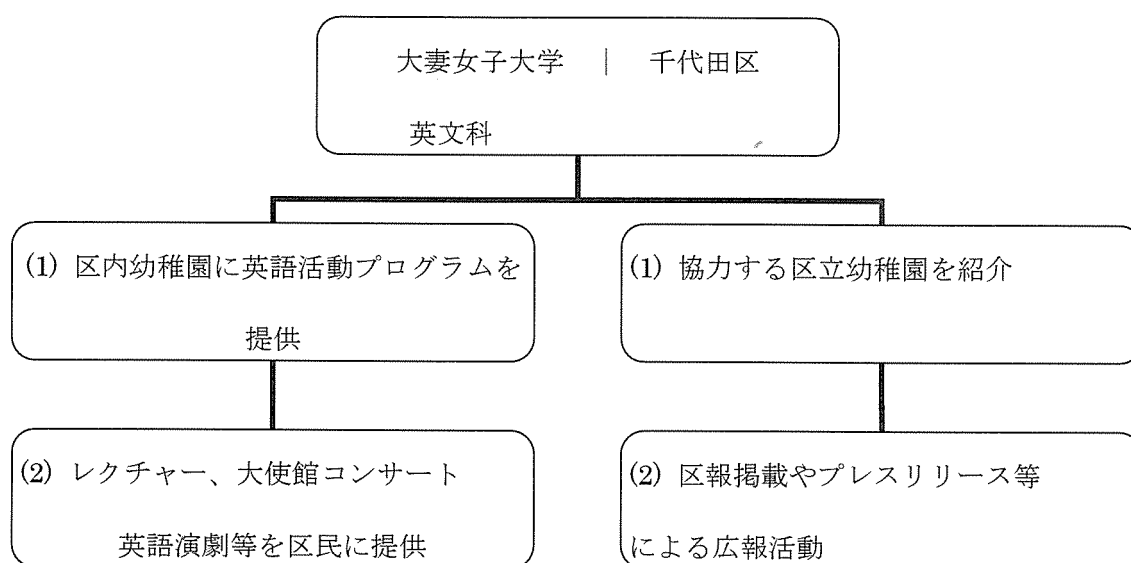
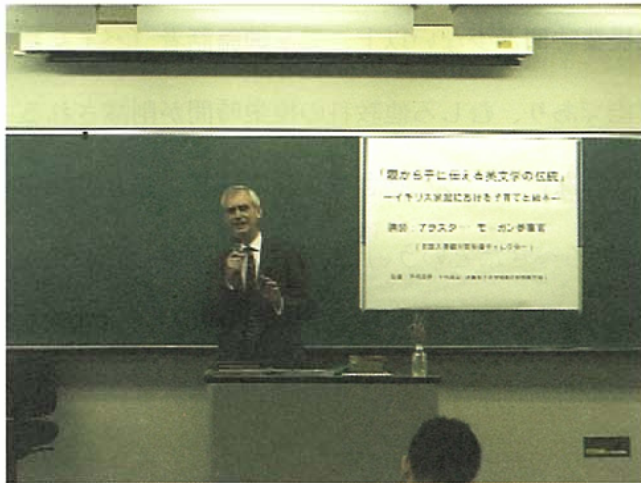


図2：大学と地域の連携による、次世代育成支援

このような活動は小さな試みであるが、今後も継続を行っていくことによって、自治体と大学の連携による次世代育成支援のひとつのモデルケースとなることを目指していければと考えている。

千代田区立お茶の水幼稚園における英語活動。山下研究員によるデモ授業の様子。



千代田学レクチャーシリーズの講演風景
第1回

「親から子に伝える英文学の伝統」
アラスター・モーガン参事官



第2回

「メキシコ、米国で経験した親子の触れ合い」
渡辺 三千代 氏

1. 幼稚園と家庭の連携による次世代育成支援

1.1 概要

1.1.1 公立幼稚園における英語活動の意義

公立小学校での英語活動の是非については、多くの賛成及び反対意見がある。急速に加速しているグローバル化への対応として、国際語としての位置づけが確立した感のある英語は、コミュニケーションの道具として、国際社会に不可欠である。しかしながら、現に周辺のアジア諸国でも、小学校からの英語の必修化が進んでいる現状を受け、是非とも導入すべきであるという意見がある一方で、単一言語（モノリンガル）社会である日本で、小学校から英語を導入しても、絶対的な授業時間が少ない以上、二ヶ国語話者（バイリンガル）を育成することは、現実的に不可能であり、むしろ他教科の授業時間が削減されることにより、総合的な学力の低下を招きかねないといった懸念や、母国語である日本語の国語力を強化させ、向上させる方が優先されるべきだという、反対意見も根強い。確かに、成人になってからでも外国語の習得は可能であるし、国際会議などで、英語を母国語話者に近いレベルで、自由に操られることが要求される日本人は、そう多くはないということもいえる。

それでは、公立幼稚園での英語活動の意義とは、どのように位置づけられるのだろうか。我々は、次の二点に集約されると考えている。

(1) 英語に親しむ。

早期才能教育ではない。

つまり、英語が話せるようになることを目的とするのではなく、リズムや音に慣れ、親しみをもつようになればよい。さらにそれを幼稚園の教諭や、友達、家庭での保護者で行うことで、人間関係の絆や連帯感の強

化をめざす。

(2) 社会性の発達を促す。

母国語以外の言語やそれに付随する文化に触れることで、外国語や異文化の存在を当たり前のものとして認め、受け入れることをめざす。

つまり、子供を多言語話者にしたいとか、エリート教育をしようといったことを目的とするのではない。幼児は、異なるリズムや音を理屈ではなく、感覚的に興味の対象として受け入れ、体で楽しむ。そしてこの「楽しい」体験を自分の身近にいる人々と、一緒に体験し、それを共有することは、周囲の人々との連帯感や絆を深めることに役立つと考えられる。

また、英語という母国語と異なる言語や、英米文化という日本と異なる文化に触れさせることで、世の中の多様性を是認した上で、それを受容するという態度を養成することも、このプロジェクトの目的である。

人間は、生来、自分と異質なものを疎外しようとする傾向がある。このような傾向が、いわゆる「いじめ」または「差別」等の根源にあるとすると、幼い頃から、外国語のリズムや異文化に触れさせてその異質性を、当たり前のものとして受け入れるという教育は、将来的に「いじめ」や「差別」といった社会問題の防止や抑制に役立つと考えられる。

1.1.2 絵本を核にした英語活動

前節で述べた、本プロジェクトの目的に基づき、我々は毎月一冊の絵本を選び、その本を中心としたプログラムを考えた。これは鶴田（2003）で提唱されている「物語を中心とするテーマのある英語指導」に基盤を置くものである。物語を使うことの意義は、次のようにまとめられる。

まず、第一に、物語を用いることで、ターゲットとなる英語表現が、どのようなコンテキストの下ならば、最も自然に用いられうるかが、明確になり具体的になる。これにより、正確な用法が、使用されるべき状況、シチュエーションも含めて、自然な形で感覚的に覚えらる。また物語のエピソードの一環として学習することで、記憶に定着しやすいことも利点である。

つまり、一つの物語を核にして、教たい学習事項を、ストーリーに絡ませていくという教授法は、インプットである英語活動の時間が限られている場合、非常に効率的であるということがいえる。更に、子供たちは、物語の内容自体も楽しむことができ、他文化に自然な形で親しみながら人間性の育成といった、情操教育の効果も期待できる。

さらに、保護者や幼稚園教諭といった、身近な大人による本の読み聞かせは、子供と周囲の大人との人間関係の絆を深める。特に幼稚園で読んだ本を、付属の音声教材と一緒に、家庭でも保護者と一緒に読むことによって、何度でも手軽に英語体験を繰り返すことができる。一回の絵本を読む時間はそう多くの時間を要しないので、毎日とはいわなくとも、週に複数回行うことができる。幼稚園と家庭で同じ教材を一日に数分、しかし何度も継続的に子供に聞かせることで、英語の音やリズムに確実に慣れることができる。

1.1.3 プログラム

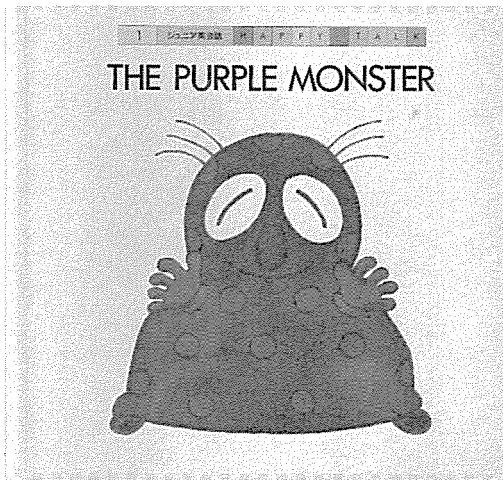
前節で述べたことに基づき、具体的には、半年間の試験的プログラムとして、6冊の絵本を選び、次のようなテーマを作成した。

「公立幼稚園での、絵本を中心とした英語活動プログラム」

(1) 5月: *The Purple Monster*

■テーマ 「あいさつ」

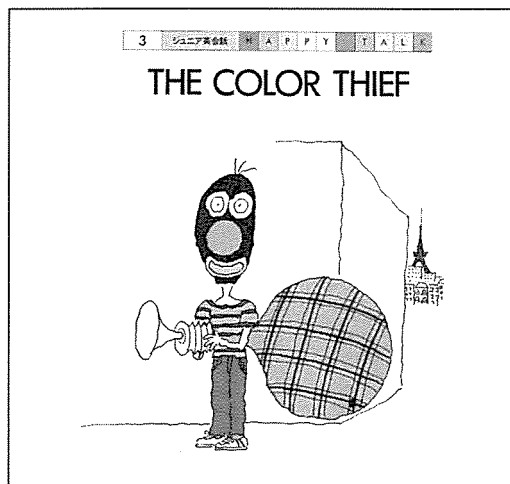
■物語: パープルモンスターは友達が欲しいのに皆が怖がって誰も近寄らない。だが最後に無邪気な子供たちと友達になることができる。



(2) 6月: *The Color Thief*

■テーマ 「色」

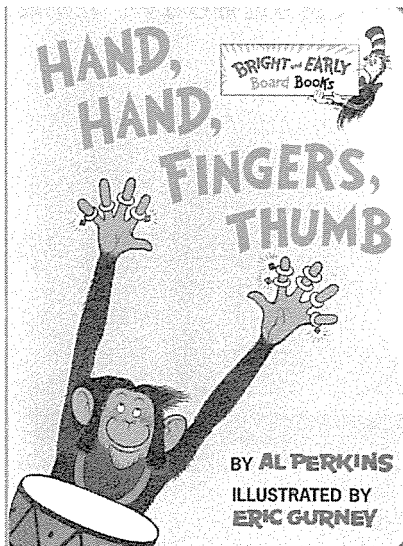
■物語: 色泥棒が町中のさまざまな色を、持っている袋にとりこむが、最後に袋を落としてしまい、中の色が虹になって大空に広がる。



(3) 7月: *Hand, Hand, Fingers, Thumb*

■テーマ 「数」

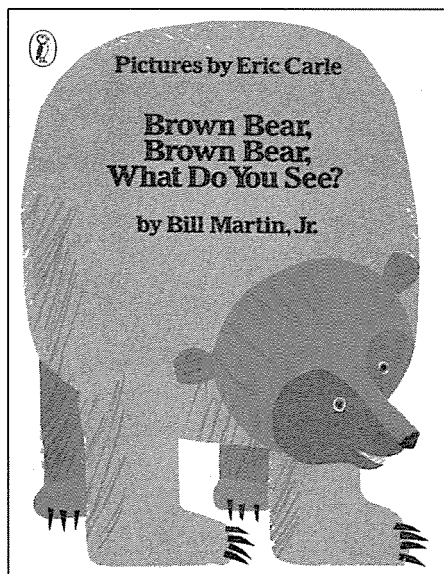
■物語: たくさんのおサルさんたちがドラムを叩く。(ストーリーは特になく、英語のリズムの面白さを味わう絵本。)



(4) 10月: *Brown Bear, Brown Bear, What do you see?*

■テーマ 「動物」

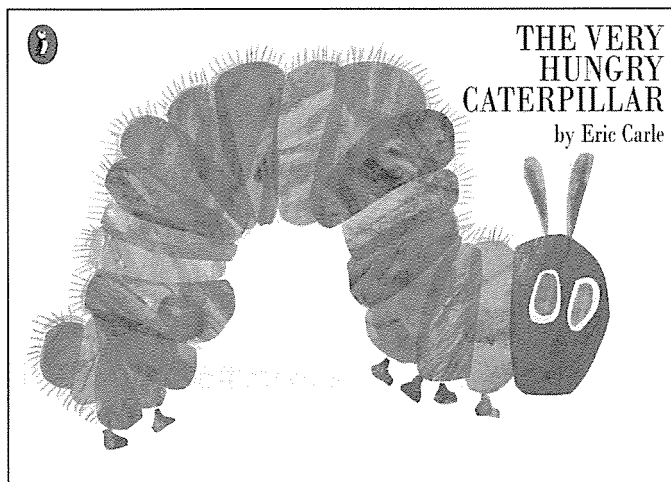
■物語: 「茶色いクマさん、何見える?」「赤い鳥さんがこっちを見てる。」「赤い鳥さん、何見える?」「黄色いアヒルさんがこっちを見てる」...とリレー式に問答が繋がっていく。



(5) 11月: *The Very Hungry Caterpillar*

■テーマ 「果物・野菜」

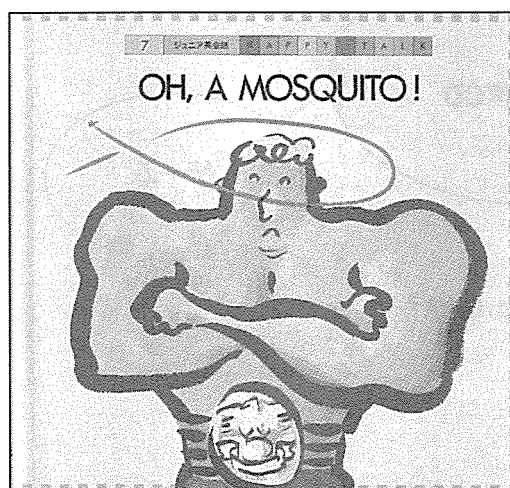
■物語: 腹ペコ青虫が月曜にリンゴを1つ、火曜に梨を2つ、水曜にプラムを3つ...と食べていって、最後にさなぎになり、蝶になる物語。



(6) 12月: *A Mosquito*

■テーマ 「体の部分」

■物語: 蚊がブンブンと飛んできて、肩、膝、足、あごなど、追い払っても、さまざまな所にとまり、つかまえようとしても、結局逃げられる。



1.1.4 プログラムの運用方法

我々が提案したのは、以下のような英語活動方法である。

幼稚園と家庭が連携して、同じ英語の絵本とそれに付随した音声教材（CD）を用いて、一日 15 分程度の絵本の読み聞かせを週に 3-4 回行う。絵本は、前節で紹介したプログラムに基づく。

月ごとのテーマに基づき、一冊の絵本を核に指導をする。毎月、英語活動のデモ授業を行い、新しい絵本とテーマが導入される。従って毎月はじめに、教材の運用について、研究員が幼稚園に出向き、デモ事業を園児に行う。その際、ただ絵本の内容を理解するだけでなく、歌を歌ったりゲームをしたりして、その月のテーマに基づいた学習項目を学ぶ。その構成は、以下のように図示される。

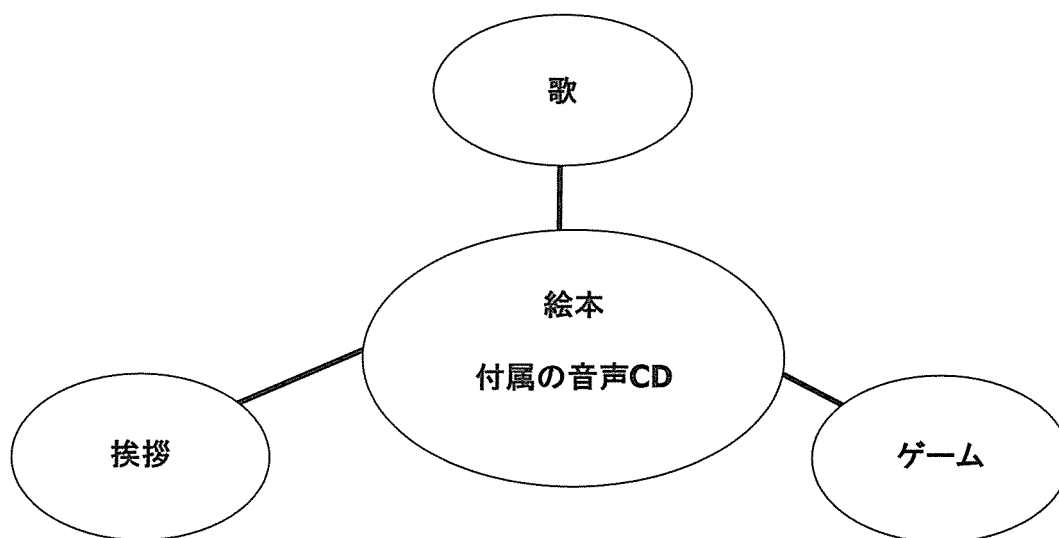


図 3：デモ授業の構成

その後は、幼稚園でまたは家庭で同じ絵本を音声教材と共に、好きな時間に何度も一ヶ月間、読んだり聞いたりすることで、学習項目の定着を図る。

前月までに出てきたテーマ項目は、次の月の新しいストーリーに基づいて、また違った形で繰り返される。これにより、興味を減じることなく前月までの復習がなされる。このスパイラル的な学習様式は下の表のように表される。

		挨拶	色	数	動物	果物・野菜	体の部分
5月 挨拶	<i>Purple Monster</i>	Hello Song					
6月 色	<i>Color Thief</i>	Hello Song	身近な物の色を言う				
7月 数	<i>Hand, Hand</i>	Hello Song	身近な物の色を言う	身近な物の数を数える			
10月 動物	<i>Brown Bear</i>	Hello Song	身近な物の色を言う	身近な物の数を数える	動物のお面を使い鳴き声を学習		
11月 果物・野菜	<i>The Very Hungry Caterpillar</i>	Hello Song	身近な物の色を言う	身近な物の数を数える	歌で動物の鳴き声を復習	果物や野菜の名を言ってみる	
12月 体の部分	A Mosquito	Hello Song	身近な物の色を言う	身近な物の数を数える	歌で動物の鳴き声を復習	果物や野菜の名を言ってみる	体の部分名称を知る

表1：スパイラル学習プログラム

1.2 実践報告

前節に紹介したプログラムに基づくプロジェクトは、平成17年3月30日に千代田区とのヒアリングを経て、4月19日に採択が正式に決定された。またこのプロジェクトを受け入れるモデル幼稚園として、千代田区立お茶ノ水幼稚園が選択され、4月27日に幼稚園との最初の打ち合わせが行われた。

区内7つの幼稚園のひとつである、お茶の水幼稚園は、東京による「日本の伝統・文化理解教育推進校」に指定されている唯一の幼稚園でもあり、普段から日本の伝統文化への親しみや、昔ながらの東京の下町気質の良い面、すなわち気さくで暖かい人間関係の育成を、日常の幼稚園教育の中に積極的に取り入れている幼稚園である。

私たちの千代田学プロジェクトは、英語活動を通して他言語や他文化にも親しみ、「違い」を受け入れること、及び幼稚園と家庭が連携して、より密接な人間関係の絆を育てるということに目的を置いていたため、自国文化も他文化も「受容」し「尊重」するという教育姿勢が一致したことは、本当に大きな幸運であったと考えられる。

まず、保護者に「千代田学」の趣旨を説明し、このプロジェクトに協力をしていただける家庭、すなわち毎月の英語教材を、幼稚園と同じように家庭でも、子供と一緒に絵本を読んでもらえる家庭を、4歳児及び5歳児を対象にして募集したところ、総園児数4歳児13名中8名、5歳児10名中6名の協力申し出をいただいた。これは、多くても4、5件の家庭の協力を想定していた予想を大きく上回った。従って予算がオーバーになったが、これらのご家庭には、毎月、幼稚園で用いる絵本とその付属音声教材を無償で配布することとした。足りない予算は、大妻女子大学側から賄った。

教材の注文及び手配は、大妻女子大学の方で行い、毎月始めのデモ授業に合わせて幼稚園の方へ送るようにした。また付属音声教材などは、市販のものがない場合は、こちらで依頼したネイティブ・スピーカーが、本学情報メディアセンターで録音し、オリジナルのCD教材を作成した。

デモ授業は、幼稚園側の許可を得た上で、ビデオ撮影し、後で分析ができるようにした。デモ授業は第二回めと第三回めでは、希望する保護者が参観した。また半期ごとに、幼稚園担当教諭との懇談会、及び協力家庭の保護者との懇談会の場を設け、幼稚園や家庭での園児の様子や反応、また教材を使用してみてもの感想や意見等を聞いた。

また最後に、園児全員に、数分間ずつの面談を行い、それぞれの感想を聞いた。

1.3 結果

1.3.1 協力家庭の保護者アンケート

協力いただいた保護者との第一回目の懇談会及びアンケートの結果は、次のようである。(7月12日実施、保護者15名参加)。計6回のデモ授業のうち、丁度半分にあたる3回目が終了した夏休み前の時点で、保護者との懇談会を幼稚園で行った。

まず参加動機をたずねたところ、「子供に英語を習得させたい」というのが、9名で一番多く、ついで「子育てに英語を取り入れたい」という回答が7名であった(複数回答含む)。またその他が5名ほどだったが、その理由は、「楽しそうだから」「幼稚園でやってもらえるから」というものだった。幼児英語教室に通わせなかったという回答は、逆に1名と低かった。その他の結果は次頁の通りである。

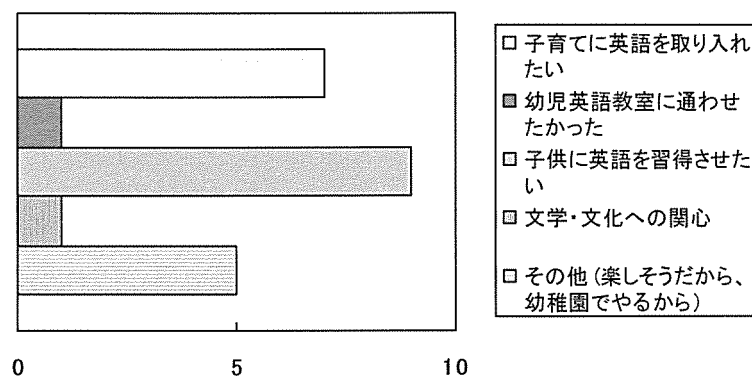


表1：保護者の参加動機

保護者の今までの長期海外滞在経験の有無は、次のようである。

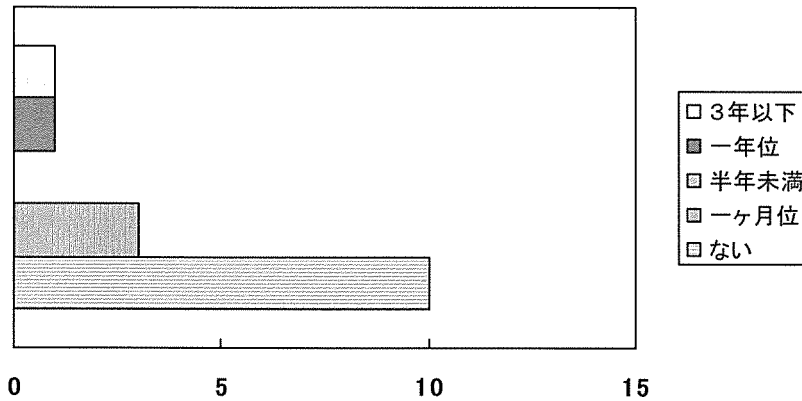


表 2 : 保護者の長期海外滞在経験

また、幼児英語教室に通わせているかどうかについての質問では、「現在通わせている」というのが2名に留まったのに比べ、「以前通わせていた」という回答が「通わせていない」という回答と同じ6名であった（有効回答数 14）。このことから、子供に英語が話せるようになってほしいという、保護者の期待がある一方で、なかなかその機会がない、また幼児英語教室のレッスンに通わせても、期待通りでなかったり、子供がなじむことができずにやめてしまっているケースも存在することが伺えた。

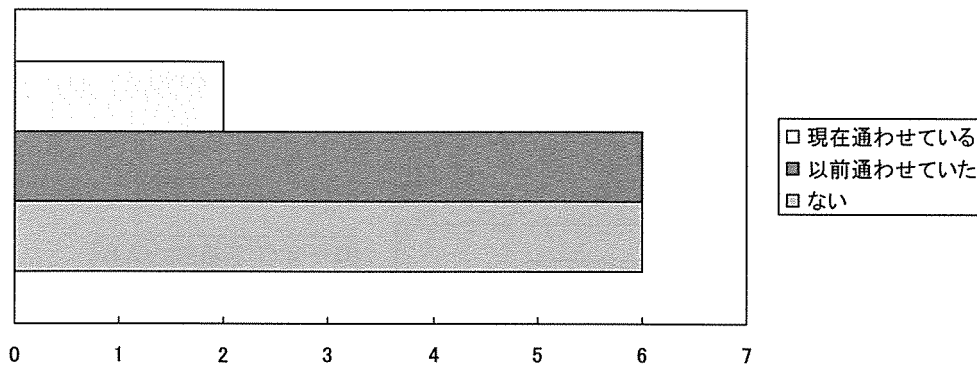


表 3 : 幼児英語教室への参加度

家庭の中で、どのように提供された英語教材を利用しているかについてのアンケートでは、「子供が自分で CD をかけて絵本を読む」と「親子が話し合いながら CD を聞いて絵本を読む」という回答が共に 6 名だった（複数回答含む）。時間に余裕があるときは、保護者と、また保護者が忙しいときは、子供が自主的に絵本を読んでいるということがわかった。

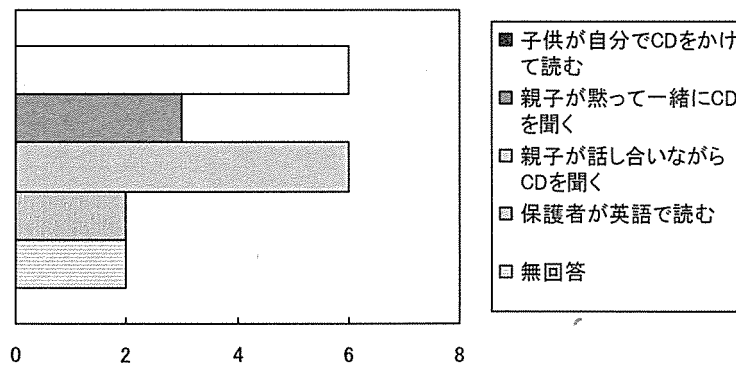


表 4：家庭での英語活動の形態

懇談会中に寄せられた、家庭における英語教材の実践についての感想としては、次のようなものである。

- 幼稚園で聞くのと同じ教材なので、楽しく家庭でも絵本や CD を聞いている。
- 親と一緒に絵本を見ることもあるが、忙しい時は自分で自発的に CD をかけてくれるので、助かる。
- 他の幼児用英語教材は飽きてしまったが、本プロジェクトのものは絵本と CD がセットになっているので、飽きない。

概して、幼稚園と家庭で連携している英語教材は、安心して使いやすいという様に、受け止められていることがわかった。また、幼児の英語に対する反応についてのコメントの主なものは、次の通りである。

- 自分で英語の音やリズムを真似て、でたらめの英語を発する。
- CDの歌やリズムを真似て、日常口ずさんでいる。
- デモ授業で教わった英語の挨拶を、親と一緒にロールプレイをして遊ぶ。

子供たちが家庭でも英語に親しんでいる様子が伺われた。

第二回目の懇談会は、全6回のデモ授業終了後、冬休み明けの平成19年1月17日に行われた（保護者15名参加）。この時にも前回と類似したアンケートが行われた。

まず、全6冊の絵本のうち、最も良かったものについては、一回目と二回目の *Purple Monster* と *Color Thief* が最も多かった。これは、幼稚園児にも同じ質問を個別面接の際にしたのだが、その結果と一致した。これはやはり最初にやった2冊が一番印象に深かったのであろうと推察される。

保護者のアンケートと園児の面接結果をひとつにまとめたものが、以下の表である（複数回答含む）。

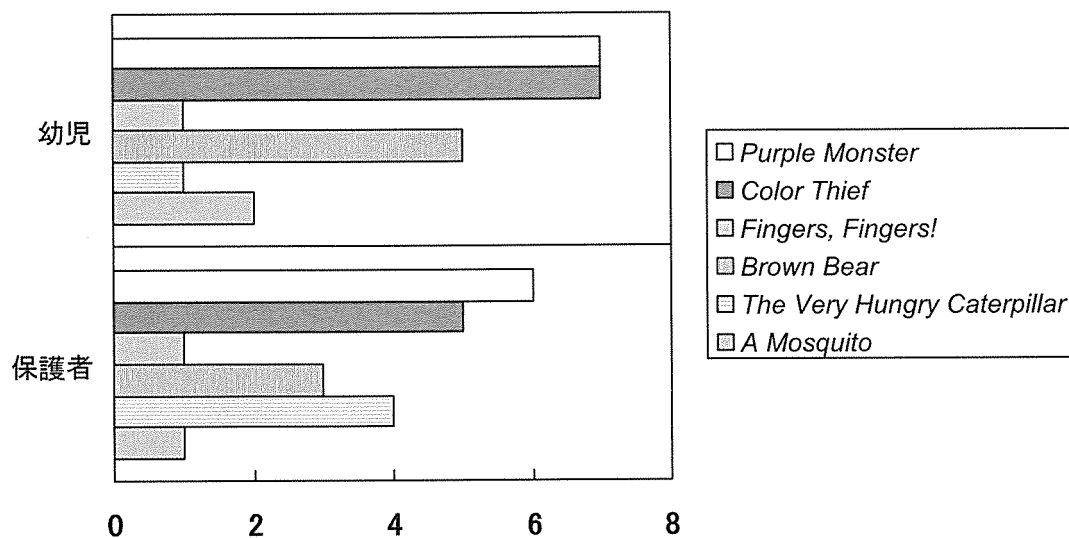


表5：絵本の好みの比較

最初の2冊を除いての好みは、上のデータを見ると、必ずしも子供と保護者とで一致し

ていないように思われる。たとえば保護者の間では、5番目に行った *The Very Hungry Caterpillar* の人気が高かったが、これはこの絵本の翻訳がかなり有名であることと関係が深いと考えられる。日本語でも読み聞かせていた本を英語でも読んであげられたことが、とてもよかったといった感想もあった。しかし選んだ本が気に入った理由としては、保護者の場合は、「子供がとても気に入って見ていたので」とか「子供が好きで口ずさむので、自然と好きになった」というように、子供主導で親も好きになるといった感想が多かったので、実際は、概ね一致しているように考えられる。

次に、家庭での教材使用回数についてであるが、一回目と二回目のアンケート結果をまとめたものが、下の表である（複数回答含む）。

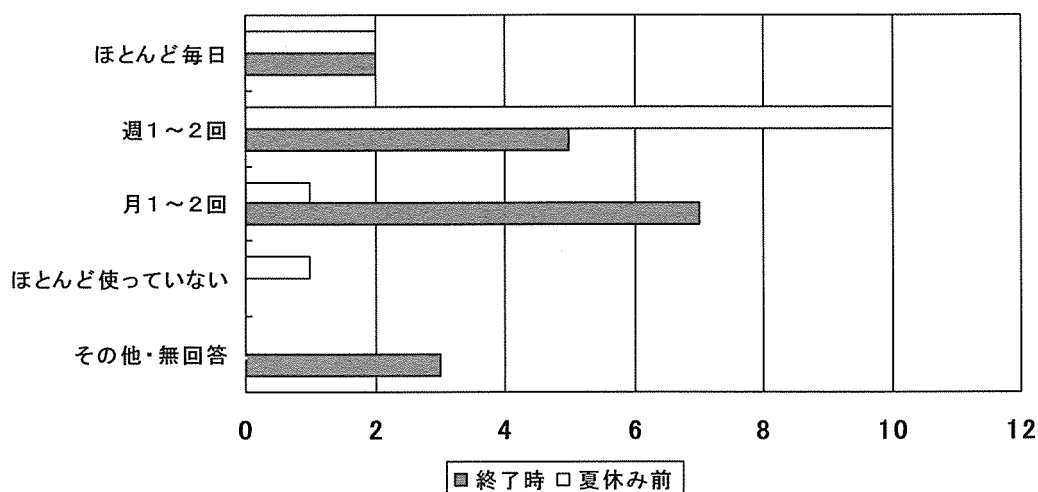


表6：家庭での教材使用回数

一回目では週1回から2回と答えた保護者が一番多かったのに対して、二回目では、月1回から2回と答えた保護者が増えた。やはり、ひとつのことを飽きずに継続して行ってもらえるようなシステムを考えることが、今後の課題であると考えられる。但し、今回のプロジェクトは、飽くまでも「英才教育」などではなく、英語に親しむことで家族の絆を深め、幼児の社会性を養うということが目的であるので、強制的な英語活動では逆効果になる。その点も踏まえて、より魅力的なプログラムづくりを考えていかななくてはならないのではない

かと考える。

複数の保護者から一様に寄せられたコメントで興味深かったのは、幼稚園で他の園児たちと使った教材だからよかったという声である。つまり、幼稚園で他の友達と一緒に、楽しい共通体験としての英語活動があり、その楽しい共有体験について、同じ教材を見ながら保護者と話し合ったり、保護者とまた新たな英語体験を行うということが効果的であり、英語に親しみを抱く大きな要因となっているという感想が多かった。

その他、年間の英語活動プログラム全体を通して、幼児に見受けられた変化について自由に書いていただいたコメントは、次のようなものである（抜粋）。

- 発音がよくなった。あいさつを英語で話せるようになり、座ったりたったりなどの簡単な言葉を理解できるようになった。
- もともと英語が好きだったのですが更に興味を持ったように感じます。
- 最初の頃はあまり聞きたがらず、思い出したとき位だった。最近自分から CD かけないの？と声をかけてくるようになり、楽しそうに声に出してマネしたりする姿が見られる。
- テレビを見ていて、「今何言っているの？」とか聞いてくるようになり、多少なりとも英語に興味が出てきたように思います。
- ボキャブラリーが増えた。「これは英語で何？」という質問を受けるようになった。
- 子供が突然「ママ、リンゴを英語で何ていうか知ってる？」とか聞いてきたり、英語の会話風に話したり、自然に身近になっているようです。
- 色々な国や言葉があることを何となくわかっていたと思うが、今回のプロジェクトを受けてから、英語とハングル語を聴いて「これは英語だよ」ってわかるようになり、意味がわからなくてもイントネーションやリズムの違いを聞き分けるようになった。
- 子供は英語を音とリズムで覚えることができることがわかりました。意味、正しい

発音がわからなくても、CD を流すと真似て歌っていました。

- Heads, Shouolders, Knees の歌やダンスがお気に入りです。覚えやすい身近な歌を歌い続けていけば、子供も自然に覚えていくのではないかと思います。

1.3.2 幼稚園側からのフィードバック

年間を通じて、モデル幼稚園であるお茶の水幼稚園とは、連絡を密にして、あらゆる面から協力していただいた。毎回のデモ授業ごとの打ち合わせに加えて、やはり半期ごとに、年長組（5歳児クラス）と年少組（4歳児クラス）の担当教諭とは、懇談の場を設け、貴重な感想やコメントをいただいた。

どちらのクラスでも、週に2、3回程度、CD をかけて絵本に触れる機会をつくっていただいた。5歳児の様子については、音楽や歌に非常に興味を示し、飽きずに何度も聴いていた。特に最初のころは自発的にテープをかけることも見られたという。子供の中には、絵本の中の登場人物を怖がったり、例えば一番最初の絵本に出てくるモンスターの絵を怖がる子などもいたそうであるが、これは異質なものへのある意味自然な反応といえるかもしれない。最初は怖がってもやがて慣れてくる。当プロジェクトの目的のひとつが「異文化の受容」にあることから考えると、必要な通過点であるともいえる。

4歳児のクラスでも、一回に平均10分程度、取り入れ方は昼食時に絵本のテープを流したり、朝や夕方に使用したり、その時の状況にあわせてさまざまな形でとりいれていた。やはり子供たちは、5歳児同様、音楽、リズム、イントネーションに大きな興味を示す。特に、歌をかけると、体を動かして踊りだすとのことであった。

幼稚園側からいただいたフィードバックを受けて、授業の改善に役立てるようにした。たとえば、デモ授業の際、最初は4歳児と5歳児を一緒にしてデモ授業をしていたのを、3回目からは分けて、クラスごとの指導を行うようにした。これは、4歳児の方が、素直でリズム等に対する反応が早いのだが、理解力の点では5歳児の方が上といった、発達上

の差が見受けられることと、4歳児と一緒に5歳児が（年下の園児の前で失敗したくないといった意識が働いて）萎縮しがちであるという、日ごろから子供たちを見ている先生方のご意見をとりいれてのことであった。

1.3.3 個別面談による園児のアセスメント

全プログラム終了後の、平成18年12月25日に、園児全員の個別面談をそれぞれ数分間ずつ行い、いくつかの質問をした。その中の主な結果をここでまとめることにする。

まず、面談の最初に How are you? という風に英語で話しかけ、I'm fine, thank you. といった英語での受け答えができるかどうかを見た。これにより英語で挨拶、すなわちコミュニケーションの第一歩がとれるかどうかを観察したわけである。結果は下の表のようになった。

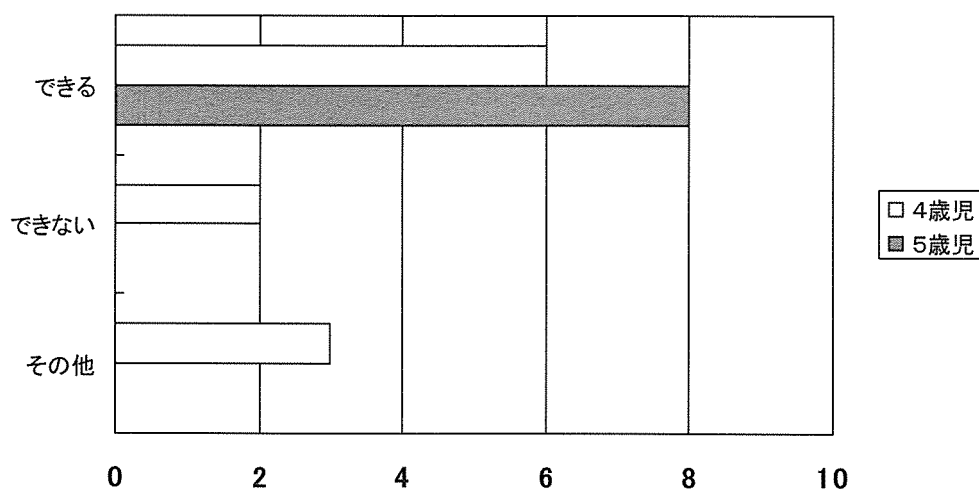


表7：園児による英語での受け答え

まず、5歳児では、全員の園児が英語で挨拶ができた。4歳児でも半数以上子が、ひとりでも英語の挨拶ができたが、内気で人見知りをする園児の中にはできない者もあった。また上の表で「その他」とあるのは、4歳児にありがちなことなのだが、How are you? と質問すると、そのまま How are you? とオウム返しをしてしまう子で、これに該当する

園児が3人いた。

園児が好きな絵本については、前節で保護者のアンケート結果と一緒に述べたので、ここでは割愛することにする。絵本が好きな理由については、前節で、保護者は、子供がお気に入りの本を自然に好きになる傾向があるようだと述べたが、子供が6冊の絵本の中から自分のお気に入りを選ぶ理由は、「(青虫が)大きくなっていくから」「(色泥棒の袋が)大きくなっていくから」「虹の絵がきれい」といったように、絵の面白さやきれいさに惹かれていたり、「蚊と人でバシンとするのが面白い」といったように、音声教材の効果音や音楽に印象づけられていたり、「モンスターが好き」「(泥棒が)色を盗むところ」といったように登場人物の魅力やストーリーの面白さを指摘したりとさまざまだった。

実際に6冊の絵本を見せて、どれが好きかをたずねたからかもしれないが、絵の面白さやきれいさに言及する園児が、比較的多かったように思われる。内容のみならず、視覚的にみても、子供に魅力的な絵本を選ぶことも、絵本選択の際に、もっと考慮に入れていくポイントかもしれない。

また、好きな歌をきいたところ、こちらは子供によってさまざまだった。Purple Monsterのように、絵本の音声教材の中に入っていた歌を選ぶ子供もいれば、挨拶の歌(Hello Song)、数を数える歌(One, Two, Three)、食べ物の歌(Apple Pie)、動物の鳴き声の歌(The Dog Says Bow-wow)など、デモ授業で学習したさまざまな歌が、子供の口から出てきた。

自宅でも英語活動をしている子供はどの子も、家でも家族と絵本を読んだことがあると答えた。また英語を続けて勉強したいかという質問には、次頁に示した通り、4歳児には「普通」とか「続けたくない」と答えた子が、若干いたが、5歳児は全員「続けたい」と答えた。

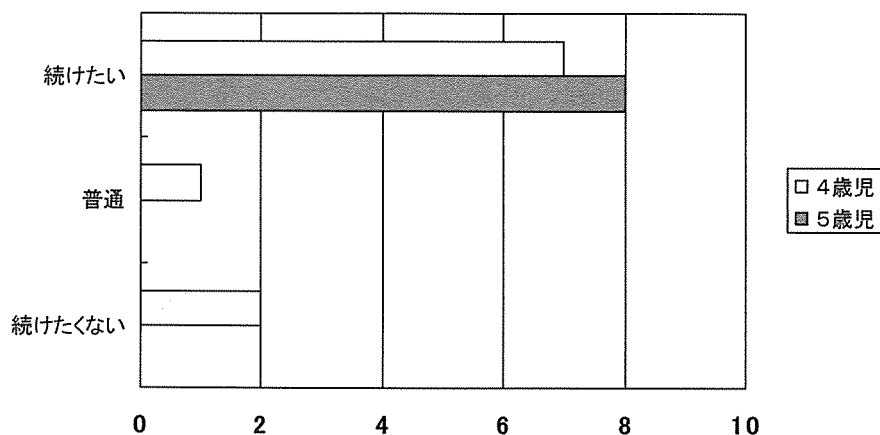


表 8 : 園児による英語活動の継続希望

以上の結果から、家庭と幼稚園との連携による幼児英語活動プログラムという千代田学プロジェクトは、子供たち自身からも、概ね受け入れられたように思われる。

1.4 まとめ

この報告書では、第一節で、「幼稚園と家庭の連携による次世代育成支援」というプロジェクトの概要を述べてきた。すなわち、公立幼稚園における英語活動の意義を、(1) 英語に親しむこと、身近な大人と英語のリズムや音を体験することで、人間関係の絆を強化することと、(2) 社会性の発達の手助けをすること、異文化を受容することは、間接的に将来的ないじめや差別の抑止効果があるという2つのポイントにおき、その上で、絵本を核にして英語活動、つまり単発的なイベントとしての英語活動ではなく、地道ではあるけれども、毎月一冊の絵本を使って、週に複数回、幼稚園と家庭で、身近な大人や他の園児たちと、読んだり聞いたり遊んだりすることで、目的を達成しようとする試みである。

第二節では、実践報告が述べられ、第三節では実践結果が、それぞれ協力家庭の保護者、モデル幼稚園関係者からの意見、コメント、及び対象園児の面談結果という三者からの反応が比較され、このような試みは、全般的にあって有効であるという結果がでた。

コメントをまとめると次のようになる。

<親子関係の強化>

保護者からのコメントでは、たとえば「家庭でも同じ教材があるので、幼稚園のことをよく話すようになった。」とか「子供が好きな絵本やよく歌う歌を自然に好きになった」といったものがあつたが、これは、英語や絵本が、親子のふれあいの一助になったと考えられる。

<先生や友達との連帯感>

「幼稚園におけるデモ授業等などの体験が、楽しい思い出として、共有されたのがよかった」といったコメントが多かった。これは、英語活動を通して、幼稚園の先生や友達との連帯感が増し、親しみが増したことを反映していると考えられる。

<社会性の発達>

日常会話の中で「これは英語で何て言うの?」といった質問をしたり、テレビに出てくる、外国の事物や外国人等に興味を示すようになった、というコメントも多数いただいた。これは、異文化への興味と共に、その「違い」を当たり前のもので受容しはじめていることを反映していると考えられる。

従って、身近な人々（担任教諭、保護者、友達）と一緒に英語活動の体験をすることで、人間関係の絆を深め、異文化や外国語への興味を喚起するという、本プロジェクトの目的は、概ね成功したように思われる。

今後の課題として考えられることとしては、第一に、より魅力のある教材を探す必要があげられる。つまりストーリーが単純で親しみやすいだけでなく、音読したときに、リズムが感じられる教材が幼児には必要である。また色々な文化に親しませるという観点から

考えると、英米に偏らず、より多様な文化的要素が取り入れられるほうが望ましいと考えられる。

第二の課題としては、継続していくためのサポート・システムづくりが必要だと考えられる。一回の時間は短くても、毎日続けるということは、大変なことである。細くても長く続くようなプログラムやシステムを考えていくことは、非常に重要であろうと思われる。

2. 大学と地域の連携による次世代育成支援

2.1 概要

ここでは、区民または区内在勤・在学者を対象として、次世代育成支援に関連のあるテーマでの講演会や、国際的なイベントを大学が主催し、それを無料開放することによって、地域貢献を考える試みをおこなった。また区の広報等で具体的には、次の2種類のイベントを行った。

(1) 千代田学レクチャーシリーズ

家庭の中で実践できる英語の取り入れ方（例えば、絵本や物語の読み聞かせや歌など）や、海外の子育て事情、及び親子関係のあり方など、区内で子育てを実践している区民の関心がありそうなテーマを選び、子供の保育時間にも、出来るだけ配慮して、講演会を年2回開催した。

(2) 大学関連行事の区民への公開

大学の文化的行事を区民に無料開放し、特に子供たちの国際的な視野を広げる支援を行った。具体的には、本学及び区内にある英国大使館との共催による、英国人ピアニストのコンサートや、本学英文学会との共催による、英国人俳優による英語演劇鑑賞会などである。

2.2 活動経過

(1) 千代田学レクチャーシリーズ

第一回

「親から子に伝える英文学の伝統：

イギリス家庭における子育て」

講師：英国大使館英投資ディレクター

アラスター・モーガン参事官

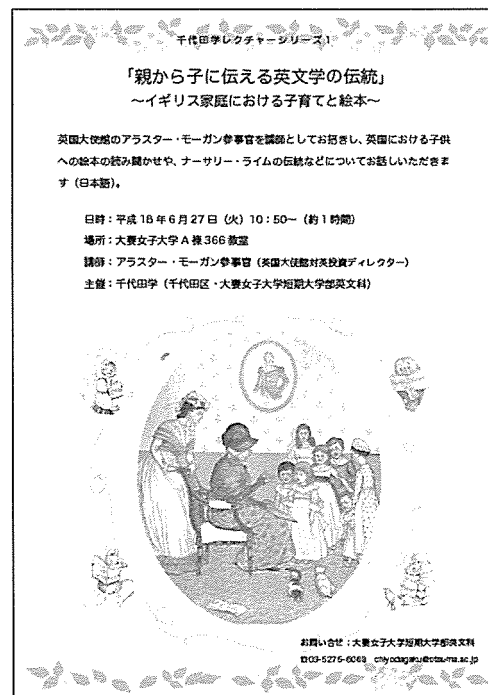
日時：6月27日 10:50～

場所：大妻女子大学 A 棟 366 室

広報：区広報誌「千代田」6月20日号掲載

参加人数 120 名

千代田区 プレスリリース (6/27)



講師略歴： ケンブリッジ大学トリニティカレッジ卒、元学習院大学講師

英国貿易産業大臣秘書官を経て、2006年8月まで駐日英国大使館勤務。

貿易政策参事官・対英投資部ディレクターを勤める。

(現在は駐中英国大使館勤務。)

講演概要

講演は、モーガン氏自身が、初めて長男を目にした衝撃から始まった。両親の持つ文化的背景を子供にどう伝えていくかについて、実体験を踏まえた自論が述べられた。特に絵本の読み聞かせについては、子供を寝かしつける際のみならず、ポット・トレーニング (トイレの躰) の時などにも、絵本の読み聞かせを行ったエピソードが披露された。また、お

気に入りの絵本の紹介、解説、及び朗読のパフォーマンスもあり、通常では聞くことができない、父親から見た子育ての実際が、かいま見られた。英国人外交官であるが故の、国際的視野に立った、文化に対する深い造詣が、にじみでていた。

第二回

「メキシコ、米国で経験した親子の触れ合い：

日本人にも学んで欲しいライフ・スタイル」

講師：演劇プロデューサー 渡辺三千代氏

日時：11月10日 14:30～

場所：大妻女子大学 B 棟 242 室

広報：区広報誌「千代田」 11月5日号掲載

参加人数 82名

千代田区 プレスリリース (11/10)

～千代田学レクチャーシリーズ2～

メキシコ、米国で経験した親子の触れ合い
—日本人にも学んで欲しいライフ・スタイル—

メキシコとアメリカにおける親子関係のありかたや子育ての実際についての講演

講師：渡辺三千代氏（演劇プロデューサー）
日時：11月10日（金）16:30～17:10
場所：大妻女子大学B棟242室

*講演終了後、アトリウムにてレセプションを行います。
*18:15～ 大妻講堂にてインターナショナル・シアターカンパニー・ロンドン
日本公演『フランケンシュタイン』もご覧になれます。（入場無料）

お問い合わせ：大妻女子大学英文研究室 ☎03-5275-0009 chiyodagaku@otsuma.ac.jp

講師略歴：青山学院大学卒業。UCLA で英語教授法の認定証取得。作家ヘンリーミラー氏に日本語のレッスンをしたこともある。現在は、翻訳・通訳業の他、インターナショナルシアターカンパニーロンドンの演劇プロデューサーとして活躍中。

講演概要

講演は、渡辺氏自身が、70年代に6年間の滞在を通して体験した、メキシコの、日本や欧米とは全く異なる価値観や、ライフスタイルについて語られた。そこに流れていたのは、たとえ生活は貧しくても、「夢」を持ち、また言葉を使って楽しみを与え合うという習慣と文化だった。

反して、現代の日本では、経済的に恵まれていても、「生きる喜び」が少なく、家族の触れ合いが貧しくなっている現状があることを指摘。総じて、もっと言葉で自分の気持ちを相手に伝えあい、いつも遊び心を失わず、日常生活の中に見出す小さな喜びが心を豊かにする糧であることを主張した。

(2) 大学関連行事の区民への公開

「ローナン・マギル ピアノサマーコンサート」

日時：6月10日 15:00開演

場所：大妻女子大学大妻講堂

主催：大妻学院・英国大使館

協賛：財団法人 大妻コタカ記念会

後援：Virgin Atlantic Airways

Kasumisou Foundation

広報：毎日新聞夕刊(6/5付) 記事掲載

大学周辺の千代田区内商店街、区

立九段小学校、一～三番町町内会

回覧に周知。

聴衆 700名

英国大使館・大妻学院 共催
Ronan Magill
ローナン・マギル ピアノサマーコンサート

"I was amazed at his general humanity and intelligence, and his is a remarkable gift"
彼の驚くべき音楽才能と知性、それは本当に光り輝かされた才能である
ヘンリッヒ・シムツォン

2006.6.10(土) 14:30 開場 15:00 開演 入場無料
モーツァルトピアノ第10番 シェーンベルグの音楽會 協

場所：大妻講堂(大妻女子大学千代田キャンパス)
〒102-8357 千代田区三番町 12番地

協賛：財団法人 大妻コタカ記念会
後援：Virgin Atlantic Airways
Kasumisou Foundation

Kasumisou Foundation is AEDG Patient Family Support Program (PFSF) へのチャリティ活動を実施します。

インターナショナル・シアターカンパニー・ロンドン (ITCL) による英語劇

「フランケンシュタイン」 (Frankenstein: The Monster and The Myth)

日時：11月10日 6:15開演

場所：大妻女子大学大妻講堂

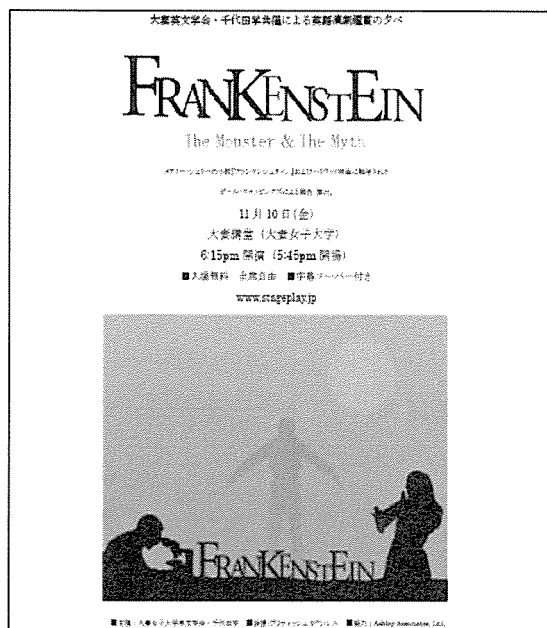
後援：ブリティッシュ・カウンシル

広報：The Japan Times (10/27付)、Herald Tribune (11/3付) 記事掲載

区広報誌「千代田」 11月5日号掲載

観客：400名

千代田区 プレスリリース (11/10)



2.3 「千代田学」レクチャーシリーズ アンケート結果まとめ

この節では、2回にわたって行われたアンケート結果を簡単に述べる。

レクチャーの主な参加者は、千代田区民を含む一般の参加者と、大妻女子大学の学生であったが、どちらの回のレクチャーでも、アンケートでは、9割以上が「大変よかった」「よかった」と答え、今後もこのような企画があれば「参加したい」と答えている。

また、参加動機については、第一回目の「親から子に伝える英文学の伝統」では、一般参加者の約半数が、「英文学や、児童向けの絵本に興味があるから」と答えたのに対し、二回目の「メキシコ、米国で体験した親子の触れ合い」では、一般参加者の四割が、「海外での異文化体験に興味がある」、約四分の一が「個人のライフスタイルや家庭のあり方に興味がある」と答えた。この回では、講演終了後に、講師がプロデュースした英国人俳優による、英語演劇「フランケンシュタイン」の上演があり、約8割の参加者が「観劇する予定だ」と答えた。多様化している人々の興味に合わせて、より個性的な講演を企画することが、今後も求められるように感じられた。

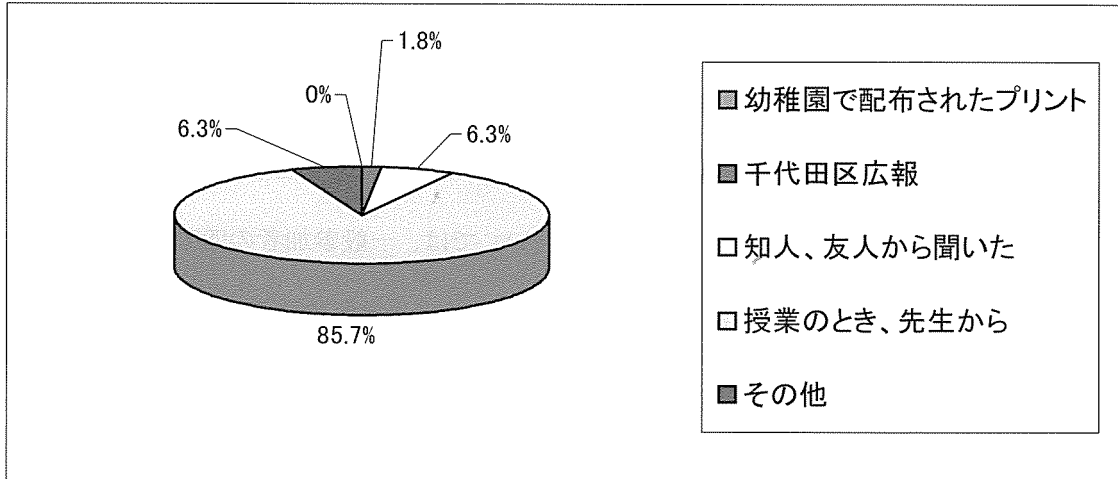
次頁より、全てのアンケート結果を掲載したので、詳細はそちらを参照してほしい。

千代田学レクチャーシリーズ 1

「親から子に伝える英文学の伝統」

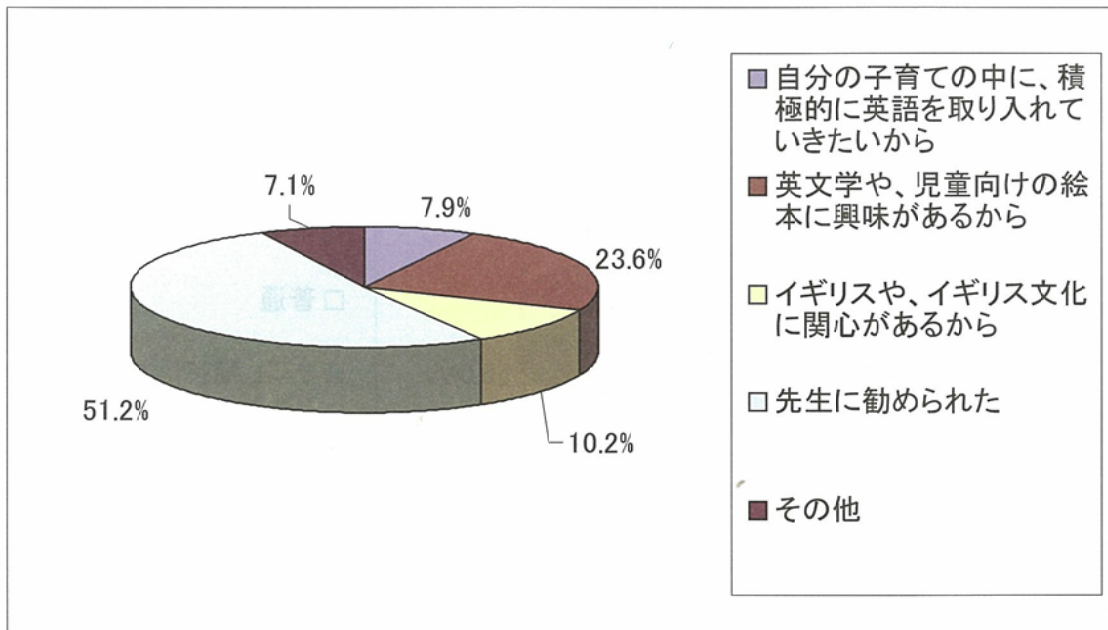
～イギリス家庭における子育てと絵本～

1. 今回のレクチャーを、どのようにしてお知りになりましたか？



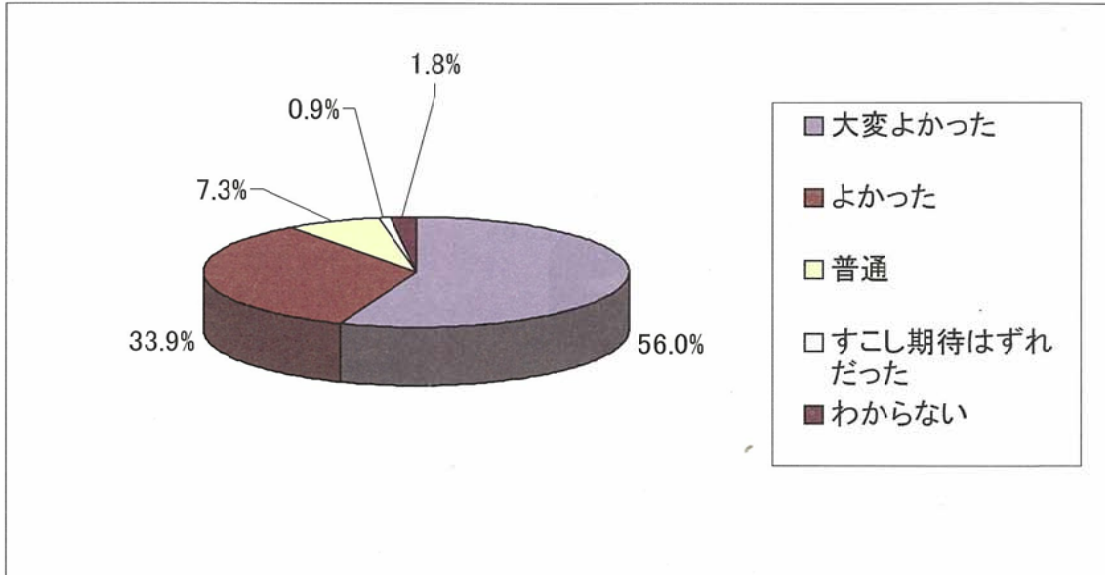
その他の理由：●掲示板で ●井上美沙子先生のご案内 ●大妻でリーディングストラテジーを担当している ●学校内のポスターを見て

2. 参加された動機は、どれですか？（複数回答あり）



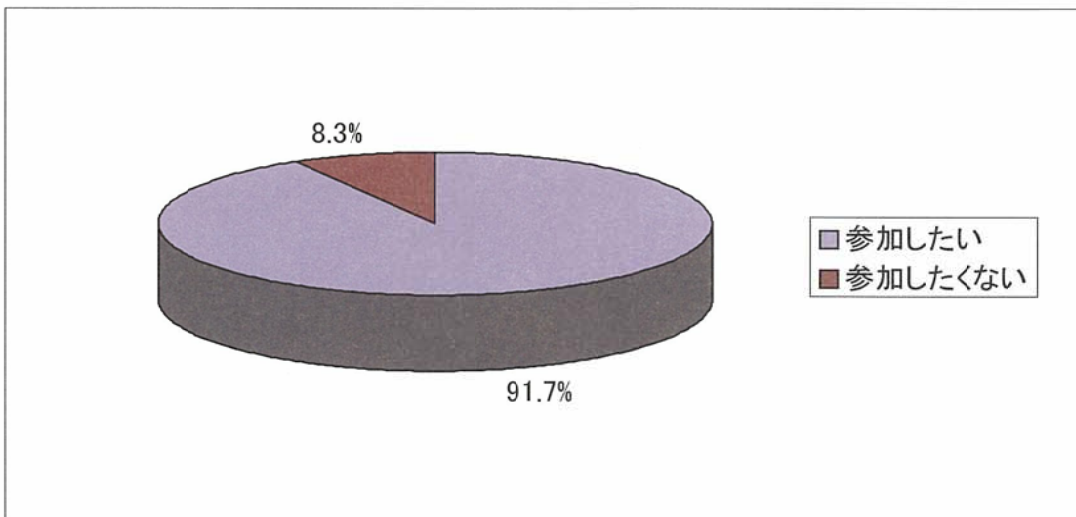
その他の理由：●授業の振り替えのために ●仕事(保育)にいかす為 ●取材の為 ●日本の国語教育に問題意識を持っているから ●幼児教育に携わっている為 ●出席を取ると言われたから ●授業の一環のため

3. 今回のレクチャーを、どう受け止められましたか？(無回答あり)



コメント：●英語で話していただいた方が聞きやすかったかもしれません。

4. 今後もこのような企画に参加を希望しますか？(無回答あり)



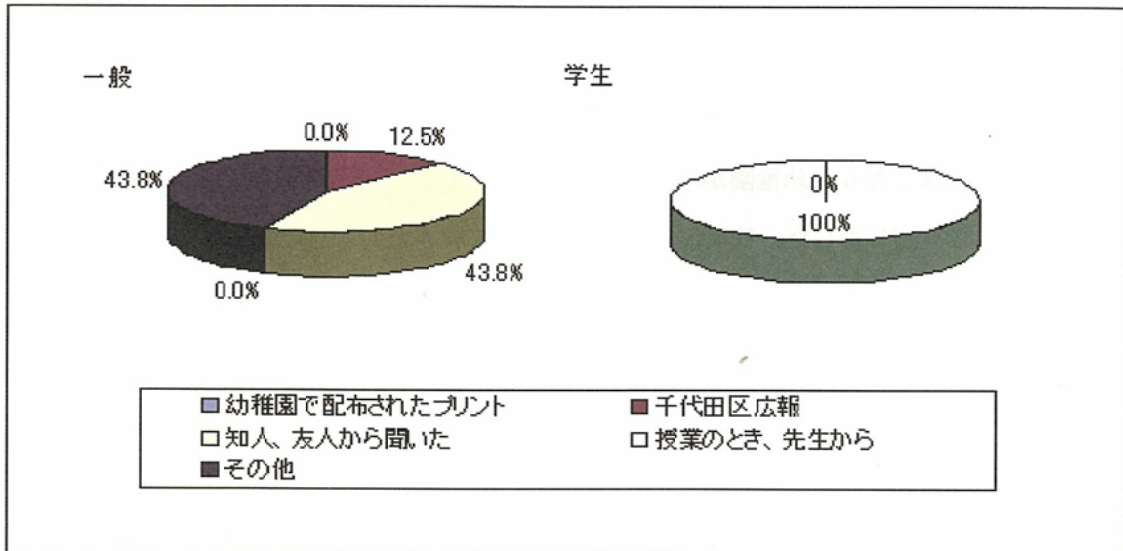
コメント：●一年に一度くらいなら参加したい

5. その他、ご意見やご感想がございましたら、ご自由にお書きください

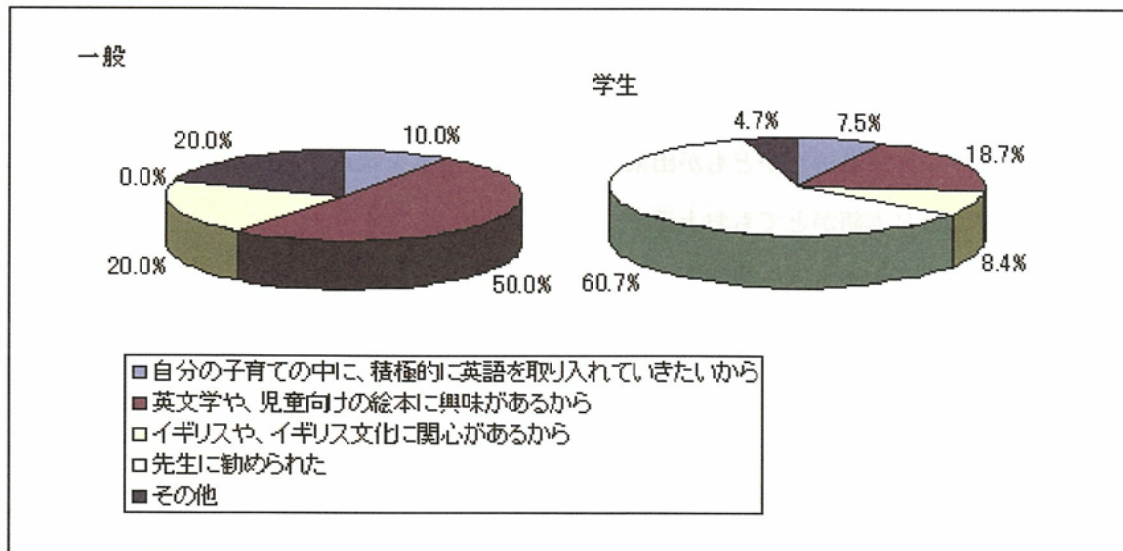
- アラスターさんの経験に基づいた話が聞けておもしろかったです。子守唄の意味はどんな意味だったのでしょうか。
- とても面白く聞けて勉強になった。これからもイギリスの文化を勉強していきたい。
- 日本の昔話、民話の絵本についてはどのようにお考えですか。
- 時間が短かったのが残念でした。
- 親から親に伝承したり、幼稚園から小学校にいたるまで、同じ絵本、同じ歌がつながることの素晴らしさを感じました。日本の伝統に目を向けていきたいと思います。
- 実際に読んで聞かせてくださったのが何よりも exciting でした、英語のリズムイントネーションに触れるいい機会でした。
- 大人でも楽しめる絵本でした。
- 子育てに関わった経験からのお話が聞けてよかったです。
- イギリスの子育ての様子を知ることが出来て勉強になりました。
- 男性の方が育児に関わり苦勞しながらも楽しんでいる様子が分かりました。日本人だとあまりないので新鮮でした。英語でお話いただいて、先生に通訳していただいても良かったかなと思いました。
- 日本だけでなく世界で「親が子ども日本を読み聞かせる」という習慣がかなりなくなっているんじゃないかと思います。きっと子どもの人格形成や文学への興味にかなり大きな影響を与えていると思います。自分が子どもが出来た時にたくさん本を読んであげたいと思いました。
- モーガンさんの日本語がとてもお上手で、話も面白かったです。
- 読んでいただいた本がもう一度聞きたいので自分で買って読んでみたい。
- もっといろいろな国の伝統などを聞いてみたい。
- 異文化を感じた。
- 子守唄をもっと歌ってほしかったです。スライドや写真があつたらもっと楽しかったかなと思います。
- イギリスと日本の子どもの育て方にはいろいろな違いがあることがわかりました。
- これから少しずつ英語で書かれた絵本を読んでみたいと思いました。絵本はやはり素敵だなあと思いました。

一般の方の動向と学生の動向を比較した結果

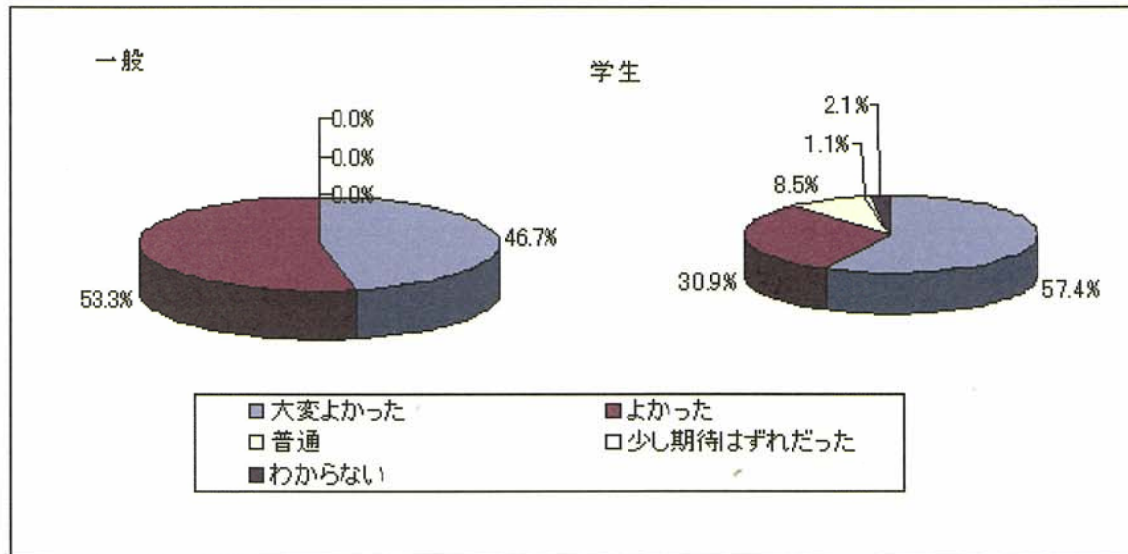
1. 今回のレクチャーを、どのようにしてお知りになりましたか？



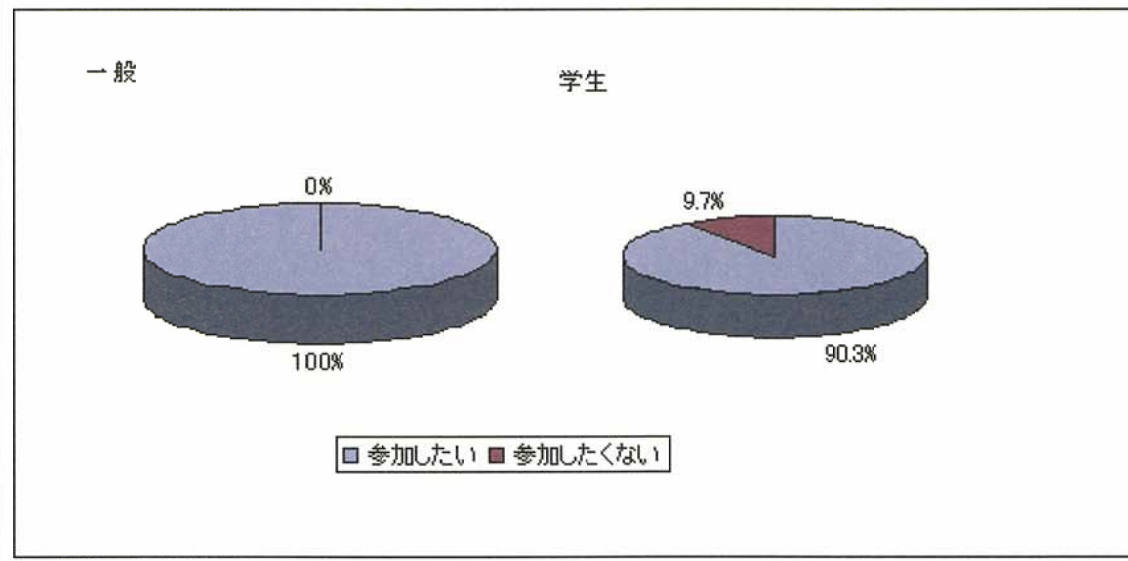
2. 参加された動機は、どれですか？（複数回答あり）



3. 今回のレクチャーを、どう受け止められましたか？(無回答あり)



4. 今後もこのような企画に参加を希望しますか？(無回答あり)

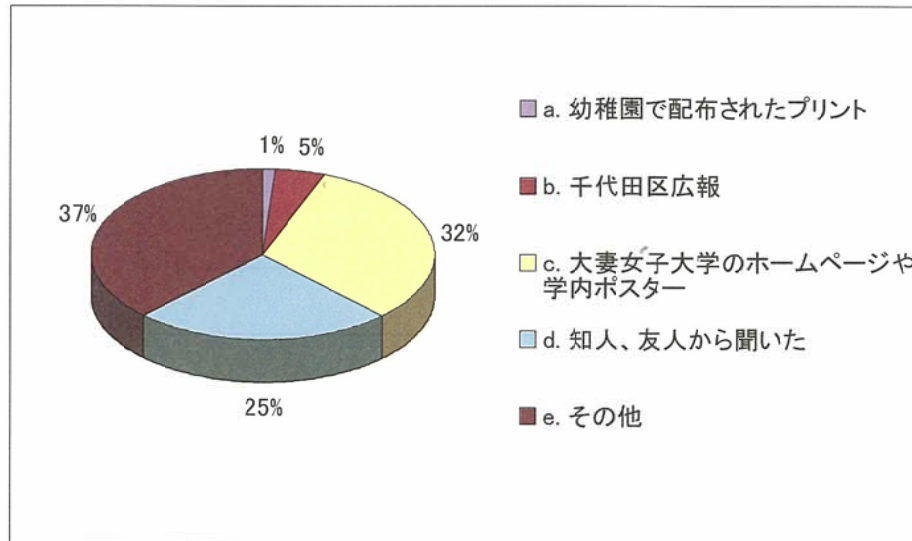


千代田学レクチャーシリーズ2

「メキシコ、米国で経験した親子の触れ合い」

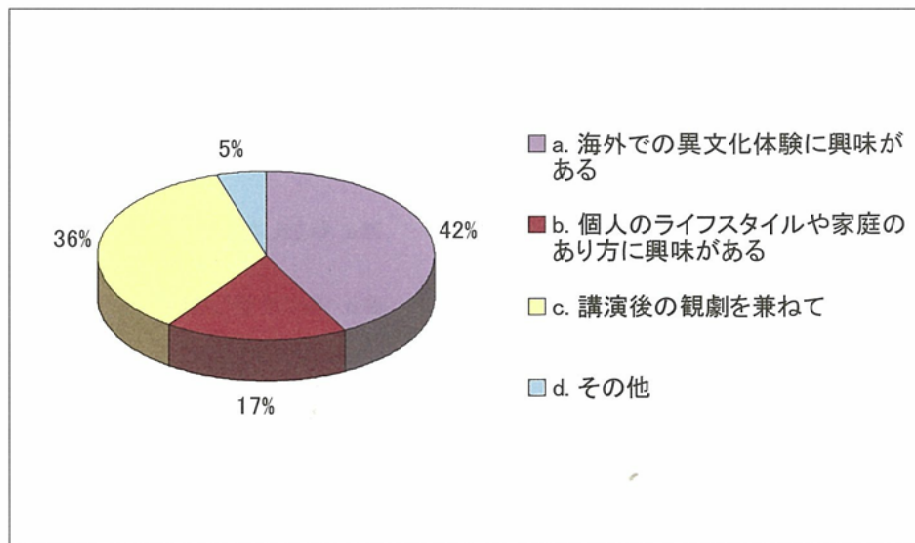
-日本人にも学んでほしいライフ・スタイル-

1. 今回のレクチャーを、どのようにしてお知りになりましたか？（複数回答・無回答あり）



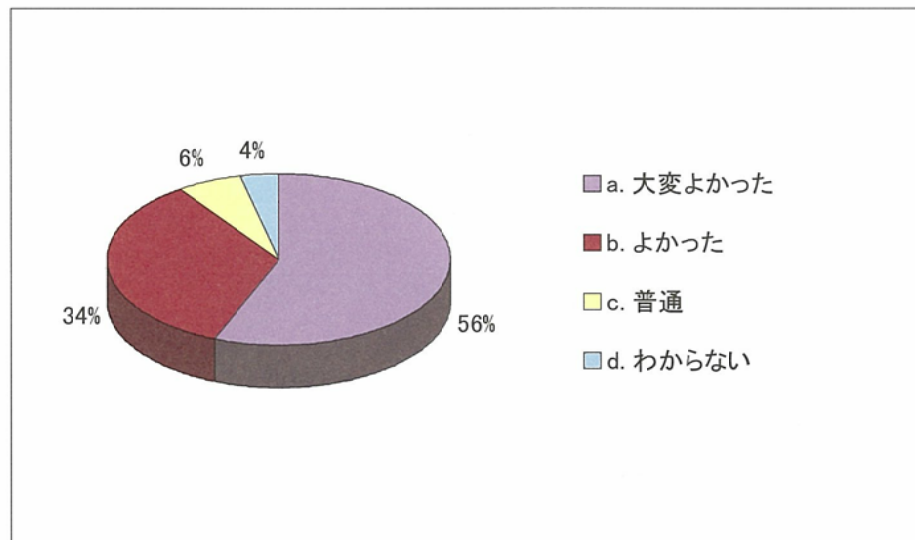
その他：●先生から聞いた ●講演者から聞いた ●配布プリントで

2. 参加された動機は、どれですか？（複数回答あり）

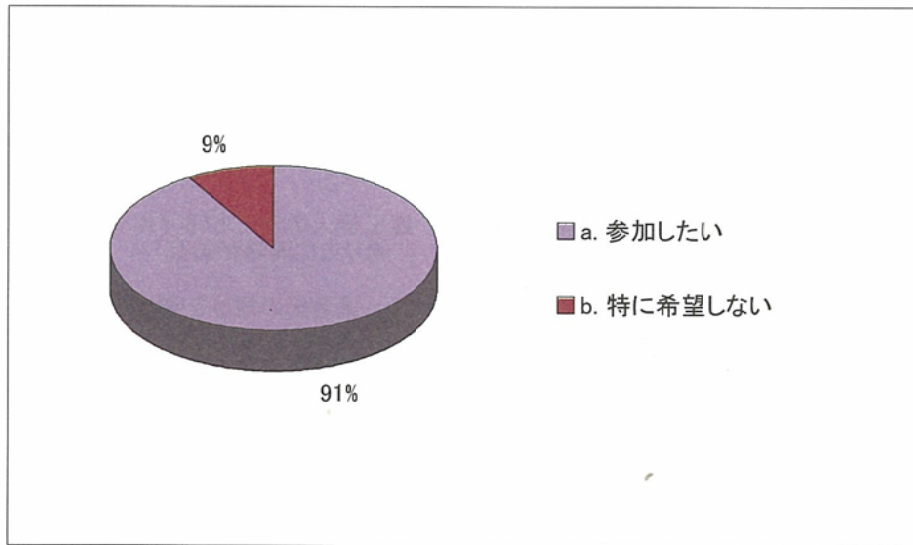


その他：●メキシコ滞在経験があったから ●先生から勧められた為

3. 今回のレクチャーを、どう受け止められましたか？

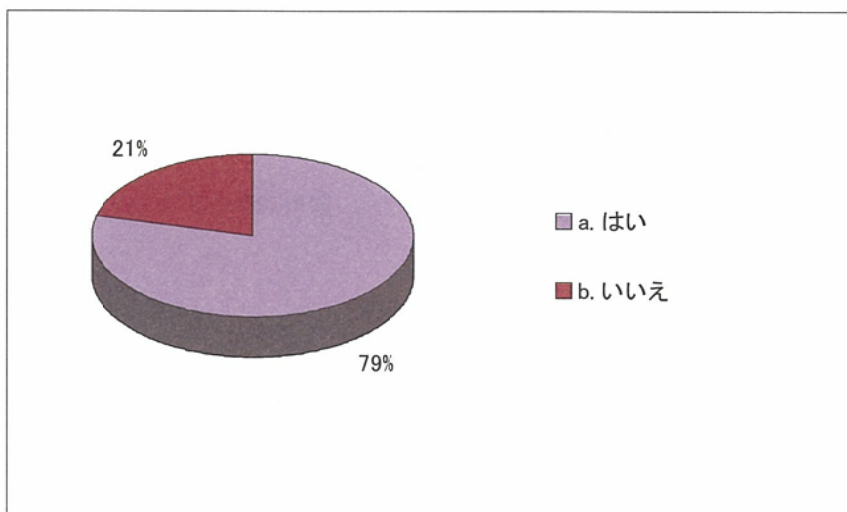


4. 今後もこのような企画に参加を希望しますか？



コメント：内容によっては希望する

5. 講演後の「フランケンシュタイン」講演はごらんになりますか？（無回答あり）

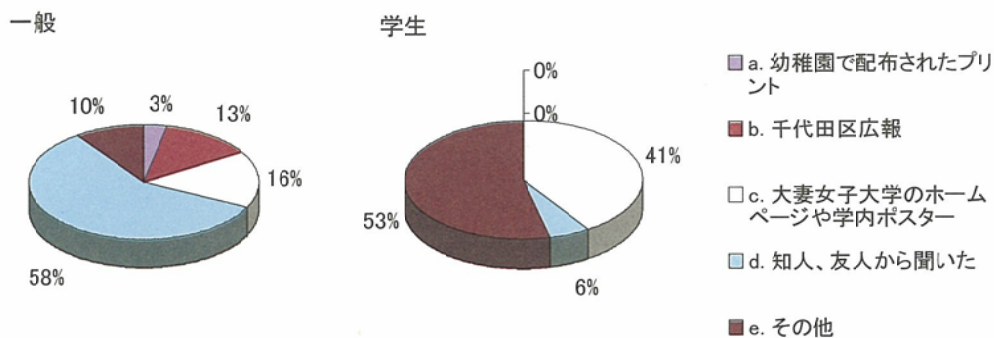


6. その他、ご意見やご感想がございましたら、ご自由にお書きください

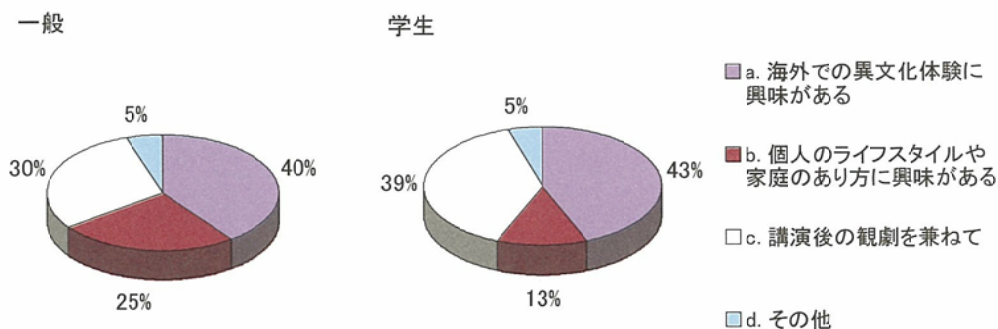
- 本当に心から同意したいと思うところが多く、楽しかったです。
- コМПレックスはバネになるという言葉にとっても感銘を受けました。
- 大変よいお話で私もメキシコに行きたくなってしまいました。今回レクチャーを受けてよかったなあと思ひます。
- 言葉の大切さを知りました。
- 体験に基づいていたお話で身につまされる思いで聞きました。素晴らしい講演でした。
- いろいろな国に行って視野を広げたい。
- ますます外国の生活や文化に興味を持ちました。言葉の大切さをあらためて感じました。
- これからの人生実のある生き方ができるように、今頑張ることが大切だと感じました。今色々なことを考えることが多く、答えが見つからないことが多いけれど、答えを見つける「きっかけ」になりそうです。
- メキシコの良さがすごく分かって、いつか私も行って経験したいと思いました。
- 外国人の生活や言葉を使った愛情表現が日本人にないものだったので、日本人が外国人をならってやってみたら、日本ももっと対人関係や日常生活が良くなるのではないかと思ひました。
- 最近言葉の大切さについて考えていたので、今回の講演はととてもためになりました。
- これからは客観的に、冷静的に物事を考えてみようと思ひました。
- この話を聞いてなるほどと思うようなことばかりで、とても勉強になりました。
- メキシコについて興味がわきました。話を聞いてメキシコ人はとても素敵だと思ひました。私も「言葉」はととても大切だと思ひているので、是非メキシコに行って生活や文化に触れてみたいと思ひました。

一般の方の動向と学生の動向を比較した結果

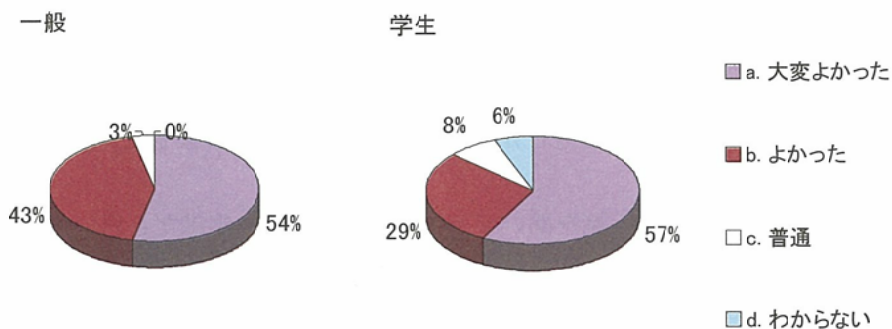
1. 今回のレクチャーを、どのようにしてお知りになりましたか？（複数回答・無回答あり）



2. 参加された動機は、どれですか？（複数回答あり）

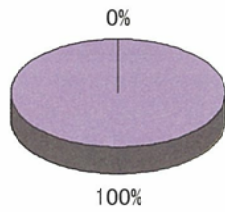


3. 今回のレクチャーを、どう受け止められましたか？

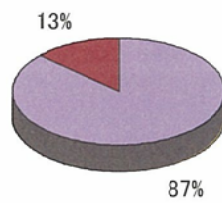


4. 今後もこのような企画に参加を希望しますか？

一般



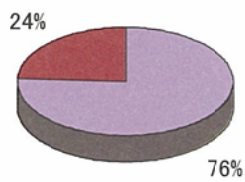
学生



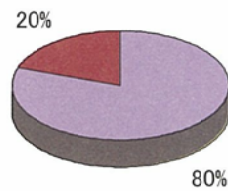
■ a. 参加したい
■ b. 特に希望しない

5. 講演後の「フランケンシュタイン」講演はごらんになりますか？（無回答あり）

一般



学生



■ a. はい
■ b. いいえ

おわりに

本プロジェクト「家庭と幼稚園との連携による、幼児英語活動プログラムの開発」で提案した、次の2つの形態による次世代育成支援は、当初の目的をほぼ達成したと考えられる。

- (1) 幼稚園と家庭の連携による、次世代育成支援
- (2) 大学と地域の連携による次世代育成支援

まず、第一番目の活動については、来年度以降は、区立お茶の水幼稚園及び、同幼稚園に隣接されている区立お茶の水小学校を対象として、追跡調査を行っていく予定である。家庭と幼稚園や小学校とが連携し、絵本を軸として、子供たちを異文化に親しませていく活動は今後も継続していきたい。

第二番目の活動については、今年度同様の活動を来年度も継続して行う予定である。大学の地域貢献として、区民を対象とした文化的催し物を、今後も企画していこうと考えている。

また今年度の活動成果の一部は、下記で発表された。

- (1) 大妻英文学会小講演会 平成19年2月14日 13:00～
「大学と地域の連携による次世代教育支援：英語を通して幼児の国際感覚と社会性を養う」
- (2) 千代田区さくら茶フェスティバル2007における千代田学研究発表
平成19年3月31日 11:45～
「家庭と幼稚園との連携による、幼児英語活動プログラム」

今後も、機会があれば、国内外の学会等で発表や実践報告をしていくことを予定している。